

「並走者として」

(ヨハネによる福音書 14:8-17)

わたしが在学当時の聖公会神学院では、神学生全員が靈的同伴者と共に歩むことが求められました。チャプレンと相談し、靈的同伴者は決められます。それから靈的同伴者と伴に祈り、語り合う中で、自分の靈的状态を見つめます。靈的同伴者の存在は、自分のために祈ってくれる人がいること、また自分も相手のために祈ることができることの大切さを教えてくれました。

創世記で神が言われるように、「人が一人であるのは良くない」。嬉しい時には一緒に喜び、悲しい時には一緒に悲しみ、悩みある時には一緒に悩み、片方が道を外れそうなら必死で止める。何よりも、いつも祈り合う相手がいる。そういう相手を通して、一人ひとりの命を大切にされる神さまの思いを知ることができます。主イエスが弟子たちを二人一組で派遣されたこと、パウロがいつも誰かと旅を伴にしたことには大きな意味があるのです。

今日の福音書で聖霊は「弁護者」と言われています。原語は「パラクレートス」というギリシャ語で、前置詞パラ「わきに、傍らに」とカレオー「呼び寄せる、励ます、慰める」から派生した名詞です。聖霊とは、人間が右に行けば右に、左に行けば左に並走して下さり、時に慰め、時に励まして下さる存在だということです。それは、神のわたしたちへの思いそのものです。一人ひとりの命を大切にされる神は、一人の人間の歩みに寄り添って下さるのです。弟子たちは、この聖霊が伴にいたから、弱く、孤独でありながらも、世界に出かけて行き、宣教の働きを担うことができました。

聖霊は時に、人を通して働くと言われます。クリスチャンはこの世において、聖霊のお働きを誰かに伝える役割を担うものでもあるのです。それゆえ、堅信式という聖霊をいただく特別な祈りを大切にしています。聖霊をいただいているクリスチャンは、この世で誰かに神の思いを届ける靈的同伴者として召されています。靈的同伴者は一方的に与える存在ではありません。同伴者自身が、相手との交わりの中で、誰かが伴にいてくれることの喜びを知るのです。つまり、クリスチャンの喜びは、聖霊によって誰かと伴に歩む道にこそあるのです。

わたしたち一人ひとりが聖霊のみ助けにより、誰かの同伴者とされますように。そして伴に喜び、伴に悲しむ歩みの中で、一人ひとりの命を大切にされる神の思いを誰かに届けることができますように。